

アメリカ：「主導的テロ国家で、それを誇りにする国家」

【訳者注】一つ前の「オバマが7か国も爆撃したと自慢」とタイトルも内容も似ているが、もちろん、それぞれ独立した論文である。このような見方が、欧米人の間で共通認識になってきたとすれば、その意味は大きい。アメリカだけは何でも特権的に許されるという“常識”が、いかに異常であるかに、自他ともに気づかねばならない。

原爆投下について、いかにアメリカ人の認識が操作されているかについての、日系米人による研究調査も面白い。戦後70年たって、やっとアメリカの本性と悪質な意図が見えてきたとも言える。

By CJ Werleman

August 7, 2015 (Information Clearing House)

ペンタゴンによれば、アメリカの先導する ISIS への空爆は、2人の市民しか殺さなかった——ともに子供で、「おそらくシリア」だそうだ。

中東での合同空爆を調査している、非営利グループ [Airwars](http://airwars.org/) の編集した新しい報告によれば、5,600回の空爆を含む、50回以上の信用すべき事変によって死んだ市民の数は、591にのぼっている。 <http://airwars.org/>

1928年、英政治家の [Arthur Ponsonby](https://en.wikiquote.org/wiki/Arthur_Ponsonby) は、「宣戦が布告されたとき、最初に犠牲になるのは真実だ」と言ったが、彼は、曲げられた“真実”がどのようなものかを特定しなかった。しかし、もし現代史上で、アメリカが関わったすべての戦争を調べてみるならば、この犠牲は市民の死者数であるとわかるだろう。 https://en.wikiquote.org/wiki/Arthur_Ponsonby

米政府と、その信頼を常に受けているチアリーダーの主流メディアは、市民の死者についてめったに取り上げることも、論ずることもない。そんなことをすれば、我々自身の罪を認めることになるからだ。我々の罪を認めることは、アメリカが野蛮で遅れた国家、生存を脅かす脅威であるかのように自分で言っている相手国と、変わらない国家であることを、認めることになる。

「敵が罪を犯したときは、それは犯罪になる。実際、我々は全く罪を問われることなく、それを誇張しウソをつくことができる」と、ノアム・チョムスキーは *Imperial Ambitions*:

*Conversations in a Post-9/11 World*に載ったインタビューで言っている。「我々が犯罪を行ったときには、そんなことは起らなかったのだ。」

ところで、たとえあなたが、アメリカに手による市民の犠牲者を、恐ろしく偽善的な“付随的損害” (collateral damage) というような名前で仕分けたとしても、あなたは少なくともこれらの犠牲者を正確に仕分けなければならない。しかしアメリカは、市民犠牲者の数をよくても少な目に報告し、最悪の場合は、挑発的に隠ぺいする歴史的伝統をもっている。

2004年、ニューヨーク・タイムズは、ニクソン大統領と国務長官ヘンリー・キッシンジャーの間で交わされた会話のテープについて記事を書いた。あるやり取りで、キッシンジャーは、米海兵隊が500人もの市民を集団虐殺した1969年の「ソンミ村虐殺事件」を、“絨毯の下に” (under the rug) 隠したいと言っている。

<http://www.nytimes.com/2004/05/27/us/kissinger-tapes-describe-crises-war-and-stark-photos-of-abuse.html>

https://en.wikipedia.org/wiki/My_Lai_Massacre

北ベトナムと、南ベトナムのベトコンに対する空爆作戦が失敗し続けていたとき、ニクソンは怒って欲求不満をぶちまけた。「彼らは想像力がないだけでなく、ジャングルを爆撃する仕事をやっているだけだ」とニクソンは言った。「彼らはそこに入っていかなければならないのだ。実際に入っていくということだ。彼らには、あらゆるものに打撃を与えてもらいたい。大きな飛行機、小さな飛行機、手に入るものを何でも使ってもらいたい。そして少しばかり奴らにショックを与えようではないか。」

キッシンジャーは直ちに、この命令をペンタゴンに伝言してこう言った——「カンボジアでの大規模な爆撃作戦だ。あらゆる動くものに対し、あらゆる飛ぶものを使え。」

チョムスキーはこれを、「他人がやるときには民族抹殺と我々が呼ぶものへの、歴史記録の中で私の見た、最も明らかな要求だ」と評した。

数のゲーム以上のもの

ではいったいアメリカは、どれくらいの市民を、ベトナムとカンボジアで殺したのか？ これは、その質問を誰に向けるかによる。もしこれを米政府の“公的記録”に求めるならば、ほぼ200万という数値を得るだろう。しかしこれを、市民犠牲者を調査しているNGOなどに求めるなら、400万に近い数値を与えられるだろう。

200 万と 400 万の差は大きい。しかし 400 万と、平均的なアメリカ人が、米軍の軍事行動によってベトナムで殺されたと考えている、市民犠牲者数の間には、更に大きな隔りがある。「湾岸戦争：メディア、世論、一般の知識の研究」の著者たちは、アメリカ人に、戦争で殺されたベトナム人の数を見積もらせる世論調査を行っている。回答の平均は 10 万人だったが、これは公的な米政府推計の 5%、より信頼できる推計の 2.5%である。

<http://www.amazon.co.uk/The-Gulf-war-opinion-knowledge/dp/B0006DKD44>

もちろん、上の公的概数にも、信頼できる概数にも、戦後数十年の間に、化学兵器——枯葉剤 (Agent Orange) や他の除草剤——によって緩慢で苦痛を伴う死を遂げた、推計 50 万人は含まれていない。<http://theweek.com/articles/472668/agent-oranges-shameful-legacy>

より最近では、2003—2010 年間の、アメリカによるイラクの侵略と占領のストーリーは、ブッシュ政府による、イラク人犠牲者数いじくりのストーリーである。2005 年の記者会見で、ブッシュ大統領はイラクの死亡者数について質問された。ブッシュは例の、まごついた、馬鹿にしたような調子で、これまでの戦闘では「3 万人のイラク市民」が死んだに過ぎないと宣言した。

<http://www.washingtonpost.com/wpdyn/content/article/2005/12/17/AR2005121700017.html>

しかし、評価の高い英医学誌 *Lancet* は、2004 年 11 月に、ある“認識論的研究”を発表し、10 万人以上のイラク人が、侵略以来、「暴力行動によって」殺されていると結論した。2006 年には、2つの世帯調査——死者数を数えるのに最も正確な方法と考えられている——が、イラクの死者数を 40 万から 65 万の間と推計し、ブッシュの“3 万”を与太話にしてしまった。<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-24547256>

「このアメリカの、戦争での一般市民の死への無関心は、イラクだけのものではない」と、*The Deaths of Others: The Fate of Civilians in American Wars* の著者 John Tirman は述べている。「アメリカの民衆が、米軍の軍事介入が起こっている国々に住む人々に、関心をもっていることを示す証拠は、ほとんどない。」

https://www.washingtonpost.com/opinions/why-do-we-ignore-the-civilians-killed-in-american-wars/2011/12/05/gIQALCO4eP_story.html

ティアマンは、市民犠牲者に対するアメリカ人の無関心を、社会心理学者が“公平な世界 - 理論”と呼んでいるものに喩えている。これは「人間は、世界が秩序ある合理的なものであるべきだと自然に仮定している。その“公平な世界”が破られると、我々はその出来事を異常現象として片づける傾向がある」というもので、戦争がアメリカにとってうまく行かなく

なると、アメリカ人は「犠牲者を無視するか、非難さえする」傾向があるという。

アメリカの無関心

市民犠牲者に対するアメリカの無関心はまた、人種差別に基づくものでもある。これは、アメリカは常に“野蛮な敵”を服従させているという神話を持ち、この神話こそがアメリカの自画像と世界観をつくり出すものだという、文化史家 [Richard Slotkin](#) が“フロンティアの神話”と呼ぶものからきている。「野蛮な敵は無制限に人を殺し、テロを行う…文明をもつ人種を根絶し、追い出すために。そして文明をもつ人種は、相応の報復をするようになる。虐殺と復讐のサイクルがこうして始まり、それはこの両サイドを絶滅戦争へと駆り立てる」と、スロットキンは書いている。

<http://www.popmatters.com/column/170818-interview-with-cultural-critic-and-historian-richard-slotkin/>

外国の“野蛮人”と苦しみに対する無関心は、アメリカの公教育制度の中に規範として組み込まれてさえいる。米現代史の助教授 [Susan Fujita](#) は、1949年から2010年までに米合衆国で出版された米国史の教科書の研究を行った。

http://ajw.asahi.com/article/behind_news/social_affairs/AJ201408090032

原子爆弾に言及した58の教科書のうち、広島市民の死者数に触れたのは42だけであり、長崎の死者数に触れたのは18だけだった。広島については、35の教科書が、公的な国連の概数よりも低い数字をあげ、長崎については、ほとんどすべての教科書が、公的な国連の概数より低い数字をあげていた。

では国連の概数はどうだったのか？ 広島については、それは市民の死者を14万とし、長崎については、7万としている。ところで、この国連の概数を、「米戦略爆撃調査」の概数による、公的なアメリカの概数と比較してみよう。それらは、それぞれ、7万と3万5,000の市民しか殺さなかったことになっている。

我々アメリカの暴力が、我々が支配し、服従させ、占領しようとする人々に与える人的犠牲を、認めるのを拒否することによって、我々は、戦争の現実も、米帝国主義の悪行も、見えなくなってしまった。「強力な帝国の市民が、常に、植民地の状況に最も無知で、最も無関心だという事実は、帝国主義の本性に内在するものだ」と、哲学者バートランド・ラッセルはかつて書いた。

チョムスキーは言っている——我々は、我々が知らされないようにする「大規模なプロパガ

ンダ・キャンペーン」によって、最も知らない者であり、「自分の犯した罪に沈黙しているとしたら、それもまたプロパガンダなのである。」

ひとつ今度、あなたがアメリカ人たちとおしゃべりする機会があったら、自前の世論調査をやってみるとよい。ベトナム、広島、長崎、イラク、シリア、パナマ、キューバ、ニカラグア、韓国などで、どれくらいの市民が殺されたか、訊いてみるがよい。保証するが、彼らは知らないか、気にもしていないだろう。そして、それこそが——チョムスキーが 2014 年の署名記事で書いたように——アメリカを「主導的なテロ国家にし、それを誇る国家にしているもの」なのである。

(CJ Werleman は、*Crucifying America: God Hates You, Hate Him Back; Koran Curious*などの著者。Foreign Object を主宰している。詳細はツイッター@cjwerleman へ)